献　　辞

心情として誠に残念だが，教育研究への意欲に満ち個性に溢れたお二人の先輩教授が今年の３月末に定年をもってご退職になった。そのお一人は人文学部人間関係学科心理学専攻所属の杉之原正純先生，お一人は同学部同学科社会学専攻所属の阿部耕一朗先生である。

広島修道大学人文学会編『広島修大論集』第44巻第１号を両教授のご退職記念号として献呈するにあたり，お二人の先生の大学・学部運営におけるご貢献の一端をご紹介して献辞に代えさせていただきたい。

先ずは，杉之原教授と阿部教授に対し，これまでのお二人の先生の旺盛な教育研究活動とそのご業績に敬意を表し，同時に人文学部・大学の発展へのご貢献に心から感謝を申し上げます。

さて，杉之原先生は1974年４月１日に本学人文学部の助教授として就任されている。偶然にも，この時私は人間関係学科教育専攻の講師として採用された。今こうして広島修道大学人文学会の『修大論集』に記載する「献辞」を書きつつ，杉之原先生とは1974年以来今年までの約30年間，時には先輩後輩という間柄で，また時には親しい同僚といった雰囲気でともに笑ったり苦悩したりと人文学部の道のりをともに歩んできたのだなあと思い起こしている。われながら去り行く月日の早さに驚くとともに，改めて来し方への感慨を深くしている。

ご就任後の３年目，1976年に同先生は早くも学生部次長という多忙にして責任の重い職位に就かれた。この時以後の先生の教育研究や社会的活動分野等でのご活躍は枚挙にいとまがないほどであり，ここでは学部・大学の運営面における先生のご経歴の一端を紹介したい。先生は1980年から1981年にかけてのアメリカ留学後，３期６年間を学生部長として，また1989年には人文学部長として学部のみならず修道大学の運営にあたられ，2003年３月ご定年退職をお迎えになった。この道程は決して平坦ではなかった。いや，平坦でないどころか疾風怒濤とさえ表現できるほどの状況であった。

現在の人文学部の平穏に見える姿に目を向ける時，これまでの12，3年の間に学部が陥った危機的な状況を思い起こさないではいられない，それほどに重く苦しいことも体験した。そうした厳しい問題状況に直面するも，杉之原先生は何時も物静かな姿勢で理性的に対処され，周囲に安心感を抱かせた。その状況などを逐一描写することはできない。しかし，いずれにしても，実にありふれた言葉ではあるが，杉之原先生の人文学部発展へのご貢献は，いかに多くの言葉を連ねても十分には表現できないほどのそれであったと思う。重ねて敬意を表し，感謝を申し上げたい。

阿部先生は1991年4月，人文学部の教授としてご就任いただいている。この時期，本学は人文学部のみならず大学全体としてもかって経験したことのない大変に困難な問題状況にあった。しかも，不幸にも学生の間にも混乱や不安が渦巻いていた。そのような状況の真っ直中に突然身を置かれた阿部先生の驚きはさぞやと想像に難くない。しかし，先生にはそうした事態にいささかも動じることのない鷹揚さとそれまでの前任大学や公機関での多様な経験が裏打ちされていたことが，その後のさまざまな場や機会での先生の談話のなかで認識できたように思う。先生は，そうした豊富な経験や包容力をもって，学生に向き合い情熱をもって教育にあたられた。その活動は他の先生方の協力とも相まって，教育場面での学生の落ち着いた学習環境の確保につながったと思う。学習・教育場面における阿部先生の学生への思いやり等については「知る人ぞ知る」と言う言葉で表現できそうである。

大学の運営面において，阿部先生もまた，就任4年目の1994年，本学の教育の主要目標の一つとして時代の趨勢に応じて掲げていた「情報化」推進のための内部組織として初めて設置された情報センターの初代所長に就任され，同職を2期お務めになった。この間，同先生は本学の「情報化」の制度的整備，機器の全学的な配備やシステム開発に努力を傾注された。IT時代と称される今日にあって，現在の本学の電子情報システムや情報処理

システム等の礎石を築かれたといえよう。この面においても，阿部先生のご功績は大である。

キャンパスでお会いする時，いつもと言っていいほど，笑顔が絶えることのなかったお二人の先輩教授の今後のご健勝とご多幸を願ってやまない。

人文学部長　森　川　　泉